

臨床のきれはし

Sheet10

浅田 英輔

Yes to Life, No to Drugs

○「ダメゼったい」の功罪

先日、松本俊彦さんの講演があった。「ダメ絶対 だけではない」というタイトルの、依存症対応に関する研修会だった。

その中で、『「ダメ絶対」は「Yes to life, No to drugs」だったのに、Yes to lifeはどこにいったのだ』という話があった。「ダメゼったい」は、一次予防（薬物を使う前にやめさせる）にはよいが、二次予防（使った人をやめさせる）、三次予防（使ったけどやめた人の再使用をとめる、回復）にはよくないのではないか、という話だった。

薬物依存対策のキャッチコピーである「ダメ。ゼッタイ。」は、1987年ごろから使われていること。たしかに薬物依存はよくなる。やめたほうがいい。依存が進むとやめるのも大変だし、オカネもかかるし、人間関係も断ち切っていくことになる。重度依存になると、やめたとしても後遺症としての人格荒廃につながったりと、いいことはない。それは確かである。ゼッタイ、やめといたほうがいい。そこに異論はない。使い始める前にいう「ダメ。ゼッタイ。」は必要だと思う。薬物依存のヤバさについて、ある程度の知識があれば、「オレはやめとくよ」ということもできるかもしれない。薬物利用を未然に防ぐ

という意味では、重要な啓発コピーだと思う。

でも、使ってしまった人にとってはどうか。「ゼッタイダメなものを使っている」のは、非難されても仕方ないだろう。ダメなんでもん。ただ、非難していればそれでよいのか。「あいつは薬に”逃げた”ダメなやつ」といっていいのだろうか。「ゼッタイダメ」として、使用者を悪人として「撲滅」していけばよいのだろうか。

児童虐待で考えたほうがわかりやすいだろうか。虐待はないほうがいいし、しないしてほしい。「叩いたりしちゃだめだ」と踏みとどまって、違う方法でしつけするなりといった手立てをとってほしい。死んでしまったり、理不尽に苦しむ子どもはいないほうがいいに決まっている。しかし、「虐待はゼッタイダメ」といっていいれば虐待はなくなるだろうか。ましてや、国や都道府県が「虐待をゼロにしよう」というスローガンを掲げて、虐待はなくなるだろうか。厳しく取り締まれば取り締まるほど、「地下に潜る」というのはこれまでの歴史で繰り返されてきたことなのではないだろうか。虐待が「地下に潜る」というとちょっと語弊がありそうだが、つまり、

「見えないところでやる」ようになるのである。だって、やっていることがわかるととても非難されるから。

虐待でも薬物でも、やってしまう人をお願いしたいのは「助けを求めること」のはずである。早いうちにうまく援助の手が入ることで、悪化せず、そういうことをしなくてすむ生活に戻れるはずである。自分たちだけではコントロールできなくなったので、今の状況にあるわけなのだ。どちらも、エスカレートしてしまうとより「戻って」これなくなってしまう。「こんなことをしてはいけない」という罪悪感を持っていてほしいが、それと同時に「まだ戻ることができる」という思いも持ってほしい。「あそこに相談すれば力になってもらえる」という窓口も知っていてほしい。

いじめや不登校も同じである。「みんなでいじめゼロを目指します」なんてことを小中学生に唱和させるなんて、同調圧力の強化でしかない。「いじめたやつをみんなでいじめましょう」と言っているようなものである。いつまでその昭和のやりかたを続けるのか。いつまで「いじめられる側にも問題がある」という話をしているのか。いつまで「悪者探し」の話にしているつもりなのか。それは、いじめを隠し、ばれないようにし、より陰湿になっていくことを手助けするだろう。

いじめは、いじめる側が悪いというのはもちろんだが、同時に「いじめる側が課題を持っている」ということも、考えればわかることではないだろうか。「いじめ、だめ、ぜったい」というよりも、「いじめてしまう人は相談を」のほうがよいではないか。「いじめをする人は心理相談の対象である」ということを浸透させたほうが、問題の解決につながるのではないだろうか（最初のうちは「いじ

めをした人はカウンセリングに行ってもらいますからね！」とかいう罰みみたいな使い方がされることが想像されるが、そうではない）。

「普通の子」がいじめを注意するにしても、「いじめ、ダメだよ」だけでなく、「やめなよ、そういうときはカウンセラーに相談しなさいって言われたじゃん、いってこいよ」のほうが、対話的で相手を尊重している感じがするのだが、どうだろう。

「あなたがいじめをするなんて、先生、かなしい」よりも、「自分の問題に向き合う方法を身につけなさい」のほうが教育的ではないだろうか？

不登校だって同じだ。不登校は「悪」なのだろうか？「不登校ゼロの学校を目指す」というのは、何か、とても、気持ち悪い。何を目標にしているのか？？風邪で2日くらい休むと、職員会議に諮られそうである。これもまた「不登校する子どもの問題」としているからであろう。不登校ゼロを目指す学校で不登校を貫き通そうとするのは、なかなか能力なのではないかと思うくらいだが。

○「ダメな人」の排除

ここまで書いていて気づいたのだが、「ダメぜったい」みたいなものが生み出すのは、「ダメな人」を「ふつうの人」から分断することだ。正義と悪を作り出すことによって、「悪」を分断し、「普通の」世界から離し、「普通の」世界に復帰不可能にする方法だ。

クスリをやった芸能人は、全て断絶され、芸能界に復帰することは許されない（最近、少しその傾向が薄れてきているが）。

新型コロナも同じ傾向がある。感染した人が「悪」で、断絶され（隔離は必要だが）、

世の中から排除され、集中非難される。PCR検査数を増やせという声がある一方、陽性が判明すると身の回りが大変になるため、検査を受けたがらない人もいるという話もある。

これらは、小中学校からの「ダメ、ぜったい」教育の影響が強く感じられる。「いい人」と「悪い人」がいて、悪い人は排除されなければならない、「正義」によって裁かれなければならない、といった思想があるのではないだろうか。

言うまでもないが、「犯罪を容認しろ」ということではない。「犯罪者」＝「悪人」ではないよね？ということ、もう少し大事に扱う必要があるのではないだろうかということだ。

それは、罪を犯した人が復帰することを受け容れていくという意味だけでなく、「ふつうの人」が生きやすくなるためにとても大事なことに思えるのだ。

ギャンブル依存の人の復帰施設を地域が受け入れないという報道があったが、罪を犯した人の復帰施設はもちろん、いろいろな障害に関する施設や保育園の建設なども関係してくるだろう。これらを受け容れていくことは、寛容さを示すだけでなく、社会の構造をよりよいものにしていくことに関係しているに違いないのだ。

○ふつうの人

最初に書いた研修会の中では、高知東生さんも登壇した。薬物依存から復帰した人という立場である。あたり前のことだが、「ちょっとかっこいいふつうのおっちゃん」である。とてつもない悪人ではないし、素晴らしい善人でもない。ちょっとかっこいいけど。回復した人は、悪いやつでもないし、特別にいいやつでもない。「ふつうの人」である。

「ノルウェイの森」を読んだのはかなり前のことになる。村上春樹さんの小説は、いつも「ぼく」が「スゴいセックス」をしてよくわからないで終わる、っていうパターンであり、好き嫌いがかなりあるものと思う。（ちゃんと理解しているファンの方ごめんなさい）

ただ、ノルウェイの森に出てくる、レイコさんの「回復するのよ」っていうセリフが好きだ。

「治る」でも「治療する」でも「よくなる」でも「もとに戻る」でもない。回復するのだ。

「治る」ことにもこだわりすぎなところがあるかもしれない。脳損傷など、身体機能の変容は「治す」という面もあるかもしれないが、そうでなければ、「病気になるまえ」（依存症になるまえ）の自分と、そのあとの自分はそこまで違うものだろうか？「薬にさえ手を出さなかったらいい自分でいられた」のだろうか？

当然だが、「依存症」と呼ばれる状態になりたいわけではない。ならず済むならそれに越したことはない。犯罪もしなくてすむならそのほうがよい。

しかし、依存症になったからといって、それは「治す」ものなのだろうか？と疑問がある。「病気＝治す」という医学モデルが浸透しすぎたのだろうか。自分や周りに大きな迷惑がかからず、それなりに生きていけるのなら、病気があってもいいのではないだろうか。

最後にいいたいのは、タバコはまだやめないということだ。依存じゃないし！！